

---

# クラスの根暗と人気者。

暁月 憂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クラスの根暗と人気者。

### 【Nコード】

N6200Z

### 【作者名】

暁月 憂

### 【あらすじ】

クラスで根暗でいじめの対象となりつつある少年とクラスで人気者だが、クラスメートを信用していない少年。そんな二人がネットなどを通して仲良くなる…  
実は凄く似たもの同士な二人のお話。

## 【日常】

ネットの世界はいい。

だって、誰も学校での自分を知る人はいないのだから。

俺、アサクラ朝倉 カケル翔は学校ではあまり話したりはしない。

根暗だと学校のやつは思っているだろうし、話しかけられてもなかなか会話が続かないってどころじゃない。

話しかけられても「え？あ、わっわかった」とか。

それだけで会話終了。

というか、話しかけてくるやつもノート回収だとか、先生が呼んでるだとか。

そんな話しただけなんだけど。

たまに興味をもったやつが話しかけてきたときでもそんな感じで戸惑い、口ごもってしまった。

沈黙が流れ、気まずいってどころじゃない。

話すことを必死に考えても相手のことをなにも知らない。

というか興味なかったので全く相手のことを知らない。

なので話すことが見つからない。

もう自分でも少しでも話しかけてくれて嬉しいはずなのに…

…。ごめん。いいよ。君はよく頑張った。もう話しかけないでくれ  
…。

とも思ってしまう。

情けない。

その一言だ。

そして、その話しかけてくれたやつも他のやつが呼んでるとかでどこかに行ってしまったが。

中にはそんな自分をからかうように笑いながら話しかけてくる輩も当然いるわけだ。

すごく腹立つけれど。…にしても。ああ、なんて情けない。情けなさすぎだぞ！自分！！！！

と心の中에서도しかも今日あった全てのことを思い浮かべ自分のことを嘲笑いながらパソコンの画面に映っている自分の作ったウサギのようないな

耳をした青色の肩くらいある髪の少年キャラクターを動かす。ちなみにユーザー名は“ショウ” 自分の名前をただ読み方を変えただけという至って単純かつシンプルな名前だ。

俺は、ネットゲームというものはこれしかやったことがない。最初、ネットゲームは興味はあったが手を出せなかった。

理由は、パソコン自体が苦手でしかなかったのと今まで家にパソコンが一台もなかったからだ。

パソコンの授業なんてあったらもうその日は最悪な日だった。

授業中。俺は当然クラスのやつに聞けるわけがないし先生に聞くなんてもつてのほかだったため、全くもって課題もなにも進まない。おかげさまでその授業後、居残りとなって若干先生に怒られながらその課題をやった。

この文章を打ち込みなさい。とか言われても頑張っているのに一行打つのがやっとだった。

もちろん、成績も軍をぬいてその教科だけがめっちゃ悪かった。

そんな俺のパソコンの下手糞さを心配した親がパソコンを買ってくれて。

パソコン教室にも連れていかれそうになったが：  
なんだかんだで、結局通わされることはなかった。

我が家にパソコンがきたのがきっかけで俺は、なんとなくこの当時できたばかりのこのネットゲームをやり始め、そのおかげでパソコンを扱うのが得意になり、今じゃ授業とかでも困ることはなくなっ

た。  
むしろ成績もこの教科だけクラス1良くなった。

きつとこのゲームのおかげだろうなあ…。

このゲームをやってなければずっと前のままだっただろう。

もう、このゲームを始めて1年くらい経つ。

このゲームができたときからやり始めているのだ。

上にある王冠のアイコンをクリックすると一位から五位までのランキングが表示された。

シヨウは、3位という好成績だ。

今ではランキング1位になろうともしているし、いつも5位以内をキープしている。

凄いと自分でも思う。

いつの間にかはまっていていつのまにか順位があがり、ランキング1位。

そのせいか、このゲーム内でネット友達もたくさんできた。ゲーム内では知らない人もいないんじゃないかというくらい有名だ。

シヨウは凄いなあ。

シヨウも俺だが時々うらやましくも感じた。

シヨウは社交的でゲーム内では有名人。

人気もあり仲間にして欲しいという人も耐えない。

仲のいい人とかしか仲間にしなないけど。

皆から慕われ、社交的。友達も多い。

学校で友達がいない俺とは大違いだ。

それにネットで仲良くなった人も学校での俺は知らないし。

「はあーあ……」

今度は深いため息をつくど、家の下の階のほうから母さんの大きな声で少し怒っているような声がした。

『翔ー！パソコンばっかやってないではやく下に降りてきなさい！』

あ、そういやあ、夕飯だとかいってたな…。

色々考えていて忘れ切っていたことを思いだし、慌ててパソコンの電源をオフにした。

「わかったよー！今からすぐ行くー！！」

俺は、すぐさま返事を返すと電気を切り、ドアを閉めて階段を下った。

俺は階段を下りながら、仲のいい人は大丈夫なんだよな。とまだぐだぐだと考えていた。

次の日。

「『今から学校いつてきまっす』…っと。」

俺は、ボーっとしながら携帯で文字を打ち込んだ。

つい最近、今話題のツイッターというものを始めた。

はつきりいつてこれもただ前々から興味があったのと、ほかのネット上で仲の良かった人のほとんどがツイッターをやっていたからだ。

案外面白いもんだ。

一言、おはようとか、挨拶とかを打てば結構すぐに返事がくる。

“ピピッ…”

…きたきた。

携帯がなったので開いてみると、ツイッターのほうにさっき打ち込

んだ言葉による返信だった。

「おはよう！気を付けて行ってこい！！！」

俺はすぐに『多少は気を付けます！！笑』と冗談を多少いれながら返事を返した。

携帯といっても最近発売したタッチパネル式の最新型スマートフォンだが。

どうやらパソコンの魅力にはまったんじゃなく、機械の魅力にはまってしまうたらしい。

もうすぐ学校につくので俺は、マナーモードに切り替える。

俺の学校に行くとき、最近はこんな感じた。

耳には最近好きになった結構マイナーなバンドの曲が流れているヘッドホンをつけながら。

ふと前をみれば、二人の同じ学校の生徒が仲よさそうに話している。左のやつはすまないが全く名前は知らない。だけど同じクラスの一人は確実に知っていた。

クラスの中心人物の俺の憧れでもある、キシタニユウト岸谷悠斗だ。

どうしたらあんな風にクラスの連中と喋ることができるのだろう。いつも思っているやつだ。

ああいうキャラをしているやつは陽キャラらしい。



そんなやつと正反対のやつ…まさに俺は、陰キャラとかいうらしい。

だけど…なんかクラスの連中とは全然違う気がするんだよねあ…。

とかボーっと前の二人組みをみているといつの間にか、苦手で仕方ない学校についていた。

…あ。やべ、昨日やった課題を俺、鞆に入れたっけ？

急に不安に駆られ、学校の校門間時かのところで立ち止まり、俺は鞆に手をつ込んだ。

……ない。

一気に血の気がサツと引いた。

俺は、少し焦りながら鞆の中をもっと全体的に探す。

やっばりないし！！！！

ガックリと肩を落とす。

今更、取りに戻るには登校時間が過ぎるのをしょうがない…。ととぼとぼと学校の校舎内に入る前に携帯を取りだした。

すると、携帯のホーム画面にはさっきの返事のそのまた返事がきたという報告がきていた。

「おいおい…多少じゃなくて気を付けろよーw」

そして良く見れば、ほかにも色々学校に行く。という5分くらい前のツイートだけでざっと15、6通くらいの返信がきていた。そのなかには、全く知らない人からもきている。

周りを見ると人も少なく、さっきまで前にいた岸谷悠斗ともう一人名前の知らないクラスメートはいない。そして、ついでに携帯で時間を見るといつのまにか時間が経っており、もうすぐで学校が始める時間になっていた。

当たり前だろう。

いつもギリギリに学校を出ているのだから。

やばい…。

少し焦りながらも俺は『課題忘れた！』とツイッターでツイートした。

この15、6通の返すにはめんどくさいので後回しにすることに決め、携帯をポケットの中に入れ、急いで校舎へと入っていった。

教室内。

教室には、ほとんどの生徒が登校して仲の良い者同士で話をして

いた。

その中には、いつも通り、まだ朝倉はいない。

この時間が嫌なんだろうな。

と俺は思った。

友達がいらない…というか若干いじめの対象となりつつある朝倉だ。  
そんな学校に本当は来たくもないだろう。

はつきりいつて俺もこの時間が嫌いだ。  
こうやって楽しくもない、嫌いなやつと話すのも、面倒くさいし嫌  
でしかたない。

そんな事を思いながら楽しそうに目の前で話すクラスメートで朝、  
一緒にきた西野達の話を聞きながらボーっと考える。

朝倉を見ていると昔の俺を見ているようにも思う。  
そして、友達になりたい。そうも思う。

だけど、話しかけようとするたびにことごとく、邪魔が入る。  
そして、やっと話せると思い、話しに行くと『あんなやつと話すの  
か』というような目で見られる。

そんな目が嫌で怖くてダメだった。

結局、俺もこの嫌いなクラスの連中と変わらないんだと思う。

昨日、話しに行ったやつがいた。

朝倉は少しおどおどとしてまともに話せてない。

相手のやつはいつのまにか他のやつが呼んでるとかでどこかに行ってしまった。

そんなことはなかった。

アイツも他のクラスのやつと変わらなかった。

後で笑いながら話していた『アイツ、暗すぎ！マジ、腹いてえ！』と他のやつと俺の前で大笑いしていた。

そんな事を言われてるとも知らずに朝倉は、疲れたような…だけで嬉しかったというような顔を一瞬だけしていた気がする。

ボーっとそんなことを考えていると

「おい！“きつしー”？どうした」

と言われ、西野がドアップで俺の顔を覗き込んでいた。

他の話してたやつも不思議そうな顔をして俺を見ていた。

「いや…朝、担任がな…」

俺は、とっさに朝、たまたま朝みた担任ことを言つと、西野は「マジで？！」と他のやつと笑いながら話を再び開始した。

“きつしー”とは俺のことだ。

なんかコイツが勝手に付けたあだ名。

俺は、キシタニユウト岸谷悠斗

学校というものが嫌いで仕方ない。

クラスの連中というものも大嫌いだ。

それに自分自信も嫌いで仕方ない。

ただ唯一、嫌いじゃないやつは、朝倉 翔だ。

あいつは、昔の俺にそっくりだと思う。

こうやってクラスのやつと話しているのは、自分が昔のようにクラスで孤立するのが嫌だったからだ。

そこで理想の自分が今の自分だ。

クラスの人気者。

明るくて面白いクラスの中心人物という自分を作り上げた。

だけど、クラスのやつとは上辺だけ。

信用してはないし、クラスの中でもよく話す西野でも家とかは呼んだ事はない。

プライベートでは全くなかわりがない。

誘われるが全てばれないような理由を付けて断っている。

さすがに家でまで自分を作るのは疲れる。

ホント、めんどくぜえよな…。

はつきりいって、俺はちゃらちゃらしたようなやつは苦手だ。クラスの連中のようなやつは苦手の対象。嫌いではない。

そんな事を思っていると扉が開かれ、朝倉が登校してきた。チラッと俺は朝倉のほうを盗み見る。

周りのやつは、朝倉が入ってきたことにより、こそこそと朝倉の話しを始めた。

『きも…隣通ったー!!』

とか小声になっっていない小声で女子が話している。

…聞こえてるっつーの…あ、聞こえるように話してんのか。

朝倉は、少し顔を歪ませる。

俺がアイツと話せば周りの目は変わるだろうか。  
と思った。

というか俺は、朝倉は別に暗くないと思うんだけどな…。

眼鏡と前髪をもう少し変えたら顔はいいほうだと思っし。なんとなくだが。

そんな事を考えているとチャイムがなり、クラスの連中は一斉に席についた。

「おっ！じゃー!!」

とかいって鳴り終わってから西野だけ遅く席に座ったが。

しばらくすると先生がきてホームルームを始めた。

俺の席は、一番後ろの窓際だ。

朝倉の席は、廊下側の一番前から二番目。

あの席嫌だろうな。後ろの俺見たいな席がいいだろうに…。

といつも思う。

俺の日課は、朝倉の観察。  
アイツは、見てて面白い。

いつもクラスのやつにばれないように見る。

ばれたら、俺も朝倉もなにを言われるか分からない。

机の上につつ伏せになり寝る体制に入りかけたとき

「来て早々寝るな！岸谷！」

と担任が少し睨みながら俺に注意した。

クラスメートはもちろん朝倉の視線は俺のほうに集まる。

俺は、そんな視線お構いなしに軽く「サーセン…あ、先生、今日派手にこけてましたよね？大丈夫ですか？？」と担任に謝り、少し笑いながら今日みた担任にやらかしたことを言う。と担任の顔が一気に赤くなる。

プライドの高い担任は誰にも知られたくなかっただろう。

いつも俺に突っかかってくるからうざいんだよね…。

成績がいいが態度の悪い俺をあまりよく思っていないため、少しのことですぐ注意してくる。

それを言う。と視線は先生の方に向き。クラス内はざわめく。

そして西野が「大丈夫っすか！！せんせー！」と笑いながら茶化す。

担任は、少し焦りながら「そっそんなわけないだろう！！！」と必死に否定してたが。

西野が笑いながら茶化してクラスメートが笑いながら皆、朝倉意外

が茶化していた。

「先生、少し後ろやぶけてますよ。」

と止めと言わんように笑ながらいうと担任は、後ろを勢いよくみた。皆はクスクスと笑いながら隣のやつと喋ったりしている西野が俺の言葉を聞き、またそれをネタに茶化す。

俺は少しため息を吐き、また寝る体制に入ろうとすると俺の事をみていた朝倉と目があう。

朝倉は、少し慌てながら、視線を前に戻した。

そんな朝倉を少しの間様子を盗み見ながら、俺は眠りについた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6200z/>

---

クラスの根暗と人気者。

2011年12月20日20時47分発行